

大河ドラマ『南海道の晴嵐』を期して(二八八)

文出水 康生

戦国おもしろ百話

中富川合戦の鈴江新兵衛久光より十八代の今

——鈴江氏の名でパリユネスコ日本庭園に阿波の青石を——

県立文書館での企画展

わが生涯の事跡の金字塔とする徳島県立文書館で『パリ・ユネスコ日本庭園と阿波の青石——鈴江基倫関係資料から』展が開催された。文書館で阿波の青石?と展示を拝観した。奇しくも、その日に「徳島の島の石に青色片岩」との記事が徳島新聞に載った。日本地質学会が島の石とした青色片岩は県民が阿波の青石として親しむ緑色(泥)片岩とは異なることを認識し、青石への強烈な傾倒ぶりを表現



パリ・ユネスコ庭園に阿波の青石



徳島県立文書館玄関



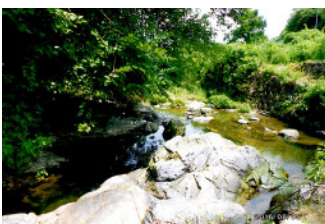
重森三玲、イサム・ノグチの色紙額



ユネスコ庭園造成中の鈴江基倫さん



ユネスコ庭園造成中のパリでの鈴江基倫さん



京畿の枯山水石庭に採取の青石の船戸谷川

した『藍と墨と青石のツイート』の著作を持つ画家の岩朝雪昭さんが早朝に電話をくれた。その報で、文書館での企画展と鈴江基倫さんと造園家としての基倫さんへの年来の関心が一体となつて、二期会の出合いの不思議をまたまた実現することになった。その二人の意を承け、年来の提唱を表現して徳島新聞の「読者の手紙」欄に「歴史ある『青石』を島の石に」を投稿し、掲載(六月六日)された。

パリユネスコ日本館に『平和の庭』

何かにつけて国連のユネスコの名が報じられる。その日本館の日本庭園が「ガーデンオブピース」の名で現在に日本の文化を表現して異彩を放っている。その「平和の庭」の作庭に世界的な彫刻家として知られる日系アメリカ人のイサム・ノグチ、昭和の日本的な造園家で庭園史研究者である重森三玲が共同し、その実現のために鈴江弥太郎・基倫父子が協力された。時に昭和三三(一九五八)年のことであつた。

イサム・ノグチ、重森三玲が意気投合して着想した庭園

実現のために「伊予の青石」を捜し、満足できずに「阿波の青石」に期待して来県し、基倫さんの父の弥太郎さんが重森三玲さんと交流があつたこと、鮎喰川上流の神山町の広谷の石材商杉山高二さんの採石場に案内して期待通りの青石を得て大小八〇個を採石して人力と馬車による陸運で徳島市の中央公園に運ばれ、そこで、イサム・ノグチと重森三玲によつて仮組みがされて五八個の石が採用され、小松島港から神戸を経てマルセイユに海上輸送されてパリへ。当時は『経済白書』にもはや戦後ではない」と書かれたが、このような文化事業には外務省国際協力局の予算は僅少であつた。文化人としての藤山愛一郎の募金活動で支援されたが資金不足の中で実現が図られた。鈴江弥太郎・基倫父子の渡航が予定されていたが、基倫さんだけが「助っ人」とし

てパリ行きとなつた。異国フランスでの日本庭園の造園は風土の違いと資金不足で難工事となつた。イサム・ノグチと野口信一の男世帯の共同生活、交代での食事作り、好みの違いや何やらとストレスが蓄積されたものであつたことを二十八歳の当時に思い返して感慨をしみじみと語られる。高度経済成長以前の「日本」の姿が、グローバル化された現在では想像を絶するほどに遠いものとされる。基倫さんに支給された航空運賃・滞在費・支度金・手間賃(留守家族に支給)など総額六八万三九〇〇円であつた。工事の従事期間は最低一ヶ月とされ、三月二六日徳島駅出発、六月十九日パリ出発、二十一日帰国の三ヶ月の稀有な体験となる。夏季には植樹ができないので、心を残しながらの帰国となつた。日本庭園はイサム・ノグチが十月に派遣された佐野輝二作庭家・

十六代佐野藤右衛門の助力を得て完成させた。昭和三三（一九五八年）当時の造園技能士の日当は四〇〇〇円であった。三五年が「日米安保騒動」、その後池田勇人内閣の「所得倍増高度経済成長政策」、三九年が東京オリンピック開催。小生の教師一年目の三七年の初任給は四七〇〇円であった。

京都の枯山水庭園の 青石は二宮船戸谷川から？

徳島県を代表する造園家として多くの名庭を築き、若い日にユネスコの日本庭園の造園に寄与した鈴江基倫さんと意気投合した。阿波の青石への熱い思いを共有し、文書館での寄託資料による企画展での公開説明会での質問・応答やドウス昌代『イサム・ノグチ』講談社文庫の記述への異議申し立てのことなど一家言を持つての共感する。重森三玲さんが造庭した昭和の庭



名東町の鈴江家で
徹・民江・基倫さんの出会い



名東町氏神の若宮神社の厄除け茅の輪



鈴江氏の氏神の鈴江神社



芹沢圭介の喜の字の藍染めを背に
鈴江基倫さん

園の全てに「阿波の青石」が使用された。それが中田勝康『重森三玲庭園の全貌』によって克明に記録されている。このことから四五〇年の昔と今の名庭、京畿の枯山水庭園の歴史を考える。五〇〇年余の昔に京の龍安寺、大徳寺大仙院などの枯山水庭園が築庭され始めた。大仙院の名石の故郷は何処ですか？と問うと「阿波の大歩危」ですと尾杉宗正園師が答えてくれた。尾崎博正『庭石と水の由来―日本庭園の石質と水系』、白根金作『京都名庭百選』で探求されていることを確認した。それらには、阿波の青石ではなく四国の青石と記録されることに、これまでの歴史認識の有りように思い至る。石英の入った青石の名石は鮎喰川筋の産出では？と考える。しかし、四五〇年の昔の細川三好の時代に、イサム・ノグチと重森三玲さんがパリ・ユネスコ庭園の

ために採石した鮎喰川上流の広谷からの輸送ができたか？と疑問を出す。この疑問に長期の造園師の体験から鈴江基倫さんが四五〇年の昔には鮎喰川と同質の青石が採集できる二宮城下の船戸川谷からの採石であったのではないかと教示される。それに同意して早速に船戸谷川の現地調査に案内してもらった。基倫さんの眼力は確かなもの。二宮城主の二宮氏と三好氏は小笠原氏からの同族で、戦国末期の中富川合戦の頃には長宗我部元親勢に圧迫されて仲違いするが、それ以前には婚姻関係があつて友好的関係であつた。久米田の合戦の時には三好実休を大将とする三好軍団の副将として出陣し、畠山高政根来衆勢に敗北した時に、二宮長門守成助は入道してト閑を称した。その退陣の時には二宮勢は一丸となつて堺まで逃れ出た、と伝承する。細

川三好氏の下での二宮氏の治政下の鮎喰川・船戸谷川などは眉山の山麓を流れて現在の田宮川・佐古川がその流路であつた。鮎喰川が現在の流路となるのは蜂須賀氏の治政による「蓬庵堤」の築堤によるもの。徳島城の眉山の青石による石垣築城も、鮎喰川の流路による水運輸送が考慮されねばならない。徳島城の石材輸送の前段階に阿波の青石の京畿の枯山水庭園への水運輸送が考えられる。

中富川合戦で鈴江新兵衛 久光の戦死

天正二〇（一五八二年）八月の中富川合戦で三好勢の多くの武将が土佐の長宗我部勢との激戦で戦死した。その中に鈴江新兵衛久光が含まれていた。その新兵衛から十七、十八代の現在に鈴江神社を氏神として祭祀する鈴江姓の三〇余軒が徳島市名東町に存続している。その一軒が鈴江基倫さん（現在は南佐古四番町）である。鈴江神社に案内される前に「加茂名を語る」（第四集）に「鈴江神社記」（吉田孝雄・鈴江豊記）を参考とし、吉田孝雄さんも三好同族で以前に「三好神社」を題材として戦国おもしろ百話に採録してい

る。鈴江豊さんの嫡子の徹さんを訪ね、豊さんの奥さんの民江さんと基倫さんが六〇年ほど経つていても「もっちゃん、たみちゃん」と呼び交わすほへえましと、写真を撮り、西瓜をいたたく。

鈴江氏の名は現在の徳島市川内町鈴江の地名を名乗りとしたとされ、その城跡が存在し、伝承がある。名東町との縁は三好長治の時代に名東の地が所領として与えられたことによると記録される。それにしても、一期一会の出会いの不思議がまたまたこのような興味ある話題で提供された。四五〇年の昔から十七、十八代の現代に鈴江氏を名乗りとしてパリ・ユネスコ日本庭園に阿波の青石を運んで「平和の庭」をイサム・ノグチ、重森三玲との意気投合の造園に「助っ人」として協力し、そのことが県立文書館での「パリ・ユネスコ日本庭園に阿波の青石―鈴江基倫関係資料から―」展で再認識される。時あたかも、日本地質学会による「県の石」の選定と絡んで、反骨をもつての異議申し立てをする。このようにグローバル世界的、日本的な規模で話題が展開し、さらに四五〇年の昔と今の歴史を考えさせるのである。